

## 地域の専門職者から提供される妊娠期および育児期の支援に関する両親のニーズと父親支援の検討

著者	三里 久美子, ケニヨン 充子, 岸田 泰子
雑誌名	共立女子大学看護学雑誌
巻	8
ページ	23-32
発行年	2021-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1087/00003425/">http://id.nii.ac.jp/1087/00003425/</a>

研究報告

# 地域の専門職者から提供される妊娠期および 育児期の支援に関する両親のニーズと父親支援の検討

Parents' needs for prenatal and postnatal support provided  
by community professionals and consideration of support for fathers

三里久美子 ケニヨン充子 岸田 泰子  
Kumiko Misato Michiko Kenyon Yasuko Kishida

キーワード：妊娠期および育児期の支援、ニーズ、父親支援

key words : prenatal and postnatal support, need, support for father

## 要旨

目的：地域の専門職者から提供される妊娠期および育児期の支援に関する両親のニーズを明らかにし、父親役割獲得を促進する支援を検討する。

方法：乳幼児をもつ4名の母親と3名の父親から、半構造的面接により得た妊娠期および育児期の支援のニーズに関する語りを質的に分析した。

結果：母親のニーズは、【知識、技術の提供と不安への対処に関する専門職者の関わり】【自分自身の身体・心理・社会面の調整】を代表とする7カテゴリー、父親のニーズは、【胎児や出生後の生活をイメージできる支援】【母親への理解と共感を促進する専門的な関わり】【日常の育児に直結する知識、技術をタイムリーに得られる機会】を代表とする4カテゴリーに分類された。

考察：地域において、産褥早期の父親役割獲得を促進する支援を補う関わり、母親を介した父親の心理・社会的支援および父親の共感性を促進する支援の有効性が示唆された。

## Abstract

Objective: This study determined parents' need for the prenatal and postnatal support by community professionals as well as examined the support to promote the acquisition of the fathers' role.

Methods: Participants included four mothers and three fathers who were raising infants. Semi-structured interviews were conducted to identify the need for prenatal and postnatal supports. The content was categorized by similarity and commonality.

Results: Mothers' needs were classified into seven categories, including "professional involvement in providing knowledge, skills and coping with anxiety" and "adjustment of one's physical, psychological, and social aspects". Fathers' needs were classified into four categories, including "support to imagine the fetus and the life after birth", "professional involvement to promote understanding and empathy for mothers" and "opportunity to obtain timely knowledge and skills directly linked to infant's daily care".

Discussion: It was suggested that the involvement of supplementing the support to promote the role acquisition of fathers in the early postpartum period, the psychosocial support to fathers through mothers, and the support to promote the empathy of fathers were effective in the community.

## I はじめに

助産師は、妊娠期には母子および家族の健康管理を支援し、産褥期には母子関係、家族関係の絆を深めることができるように個々の家族への支援を行う役割をもつ<sup>1)</sup>。近年の母親および父親は、少子化の進行に伴い、身近で育児を体験することなく、育児へのイメージをもたないまま親となるため、育児に関連する困難を生じやすい。従来、妊娠・出産・育児に関する支援は、母親を中心に行われてきたが、女性の社会進出や母親の育児不安の増加等の社会的背景から、父親の育児への参画が求められている。そのため、出産や育児に関わる専門職者による父親を対象とする支援は重要となる。

助産師による妊娠・出産・育児に関する父親への支援は、おもに分娩時の父親役割準備、父親意識、ピアサポート、妻へのサポート、アタッチメントの形成、夫婦間コミュニケーション等の促進を目的として実施されている<sup>2)</sup>。支援に携わる職種には、助産師に限らず、教育学、社会福祉学、子ども学および保育学等の専門職者も含まれる。支援の目的は多岐にわたり、両親を対象とするコペアレンティング（夫婦協同育児）の促進<sup>3)</sup>、子育ての知識や技術を含めたケアの学習、参加者相互の交流と関係づくり、子育て不安の軽減<sup>4)</sup>、父親の育児への参画の促進<sup>5)</sup> 等がある。

近年、このような父親を対象とする妊娠・出産・育児に関する支援提供は増加している。一方、先行研究では、乳幼児の父親は4人に1人の割合で育児困難感をもつこと<sup>6)</sup>、15～18%の乳幼児期の父親が抑うつ傾向にあること<sup>7)</sup> 等の支援に関する課題が明らかになっている。このような父親の心理的課題は、父親役割の獲得へ影響を及ぼすと考えられる。そのため、支援者として、支援へのニーズを正しく読み取り、身体、心理、社会的側面から多角的に父親を見つめることは基本だが、とくに父親の特徴を考慮し、心理的側面に着目していく必要がある。

これらのことから、地域において支援に携わる専門職者の立場で、妊娠期および育児期の支援に関する母親および父親のニーズを明らかにし、父親役割獲得を促進する支援をさらに検討する必要があると考え、本研究に着手した。

## II 目的

助産師を中心とする地域の専門職者から提供される妊娠期および育児期の支援に関する母親および父親のニーズを明らかにする。さらに、母親と父親のニーズを考察し、本研究では父親の特徴を考慮した父親役割獲得を促進する支援について検討する。

## III 用語の定義

ニーズ：必要と感ずること、要求および希望する内容とする。

支援：他人の活動を容易にするために力を貸し、助けることとする。

産褥早期：出産後から産科施設を退院するまでの入院中の時期とする。

育児期：出産後から子どもの小学校入学前の時期とする。

## IV 方法

### 1 研究デザイン

質的研究デザインである。

### 2 研究対象者と選定方法

研究対象者は、A大学で実施した産前産後教室（以下、ペアレンツサロン）に参加し、乳幼児を養育中の研究協力への同意が得られた4名の母親と3名の父親とした。ペアレンツサロン終了後に口頭と文書で研究の主旨を説明し、同意を得た。

### 3 データ収集期間

2020年2月

### 4 データ収集方法

30～40分程度の半構造的面接を実施し、ペアレンツサロン等、妊娠期および育児期の支援を提供する場において希望する支援や妊娠期から育児期における体験や思い等について自由に語ってもらった。母親と父親がともにインタビューへ参加する場合は、一緒にインタビューを行った。インタビュー内容は、参加者の同意を得てICレコーダーに録音した。また、ペアレンツサロン実施中に参加者の発言や様子を記録した。

## 5 ペアレンツサロンの概要

ペアレンツサロンは、首都圏 A 大学において、妊娠期から育児期に至るまでの切れ目のない支援の提供を目指し、2017 年度より運営されている。支援提供は、助産師である研究者 3 名が中心となり、児童学科に所属する研究者 1 名、地域で開業している小児科医師 1 名と看護学生より協力を得て、月 1 回のペースで行った。参加対象者は、妊娠期および育児期の母親と父親であり、単独または夫婦での参加や上子を連れての参加も可能とした。上子が参加する場合には、助産師、保育士または保育を学ぶ学生が上子を預かり、読み聞かせや折り紙等の遊びを行った。また、参加者の多くは、妊娠期より継続して育児期の講座へも参加していた。内容は、妊娠期においては、参加者同士や妊娠期と育児期の参加者との交流、妊婦体操、マタニティヨガ、保健相談、育児技術指導、胎児の聴覚に関する説明を含むピアノコンサート、調理体験や小児科医による知識の提供等であった。育児期は、母子の交流、ベビーマッサージ、ピアノコンサート、小児科医による知識の提供等であった<sup>8)</sup>。

## 6 分析方法

インタビュー内容を逐語録におこし、地域で提供される妊娠期および育児期の支援に関する母親および父親のニーズについて語られている部分を文脈単位で抜き出し、妊娠期、育児期および両時期に共通する時期別にコード化した。類似したコードを集めてサブカテゴリー、カテゴリーへと集約した。分析作業は、母性看護学の質的研究に精通している 2 名の研究者よりスーパーバイズを受け、分析の厳密性の確保に努めた。ペアレンツサロン実施中に研究者が記載した記録は、分析の

補助資料として使用した。さらに、両親のニーズと父親支援に関連する先行研究の知見から、父親役割獲得を促進する支援について検討した。

## V 倫理的配慮

本研究は共立女子大学・共立女子短期大学研究倫理審査委員会の承認 (KWU-IRBA#17115) を得て行った。研究参加者に対して研究の主旨を説明し、以下の倫理的配慮を遵守した。インタビュー調査への参加は自由意思に基づくこと、途中辞退の自由、拒否した場合でも不利益がないこと、録音したデータは本研究以外には使用せず、大学の規定等に基づき、10 年間保管後に消去すること、プライバシーの保護に努めること、インタビュー中であっても、児の世話がが必要な場合は優先して行えることを口頭および文書で説明し同意を得た。

## VI 結果

### 1 インタビュー参加者の概要

インタビューへの協力は、育児期の 4 名の母親 (初産婦 2 名、経産婦 2 名) と 3 名の父親より得られた。乳幼児の月齢は 8~16 か月であり、健康状態は概ね良好であった。参加者の概要を表 1 に示した。

### 2 地域で提供される妊娠期および育児期の支援に関する母親のニーズ

地域で提供される妊娠期および育児期の支援に関する母親のニーズについて、78 のコードを抽出し、24 個のサブカテゴリーを生成した。さらに、【知識、技術の提供と不安への対処に関する専門職者の関わり】【自分自身の身体・心理・社会面の調整】【妊娠期からの母子関係および夫婦

表 1 参加者の概要

母親	初経産	母親の年齢	母親の職業	父親	父親の年齢	出産した児の月齢
A	初産	30 代前半	会社員 (育休中)	E	40 代後半	8 か月
B	初産	30 代後半	無職	F	30 代後半	8 か月
C	経産	40 代前半	無職	G	40 代前半	16 か月
D	経産	30 代後半	自営業	参加なし	30 代後半	8 か月

表2 妊娠期および育児期の支援に関する母親のニーズ

時期	カテゴリー	サブカテゴリー	コード数
妊娠期	知識、技術の提供と不安への対処に関する専門職者の関わり	妊婦と胎児の健康維持に関することを知りたい	5
		教室の主催者に対する安心感を得る	1
		知識や技術を獲得したい	6
		専門家から正しい知識を学びたい	5
		助産師へ尋ねて疑問や不安への対処を知りたい	10
	自分自身の身体・心理・社会面の調整	出産に向けたからだづくり	3
		精神的健康を維持・増進する	4
妊娠期に育児と仕事の両立に関する情報を得る		4	
妊娠期・育児期	妊娠期からの母子関係および夫婦関係の構築	胎児や子どもの発育に良いことを学びたい	2
		胎児と向き合う貴重な時間を過ごす	2
		胎児や子どもとの一体感を得る	4
		夫婦の関係性を促進する	3
	家族へ向けた支援	父親に自分や子どもに対する行動を学んでほしい	2
		専門職者に祖父母への支援をしてほしい	1
		参加できなかった父親と話題や資料を共有する	2
	経妊婦や勤労妊婦が家族で気軽に参加できる場の提供	経妊婦でも妊娠期の支援の場へ参加したい	3
		家族で参加したい	1
		参加しやすい教室設定を望む	4
		父親が参加できる教室を望む	2
	母親同士の交流と支え合い	育児の仲間が欲しい	5
		情報交換の場を得たい	2
		自己の体験を伝承したい	3
育児期	自己の体験を他者へ表現し意味づけを行う場の提供	初めての育児で直面する母乳育児の戸惑いを表現する	2
		出産体験を振り返る	2

関係の構築】【家族へ向けた支援】【経妊婦や勤労妊婦が家族で気軽に参加できる場の提供】【母親同士の交流と支え合い】【自己の体験を他者へ表現し意味づけを行う場の提供】の7個のカテゴリーに分類し、表2に示した。以下、カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを《 》、コードを「 」, 実際の語りを「斜体」、研究者の補足を( )で示す。

1) 【知識、技術の提供と不安への対処に関する専門職者の関わり】

A氏は、「少しでもよい環境とか、気を付けたほうがよいこととか、子どもにとって良いこととか、そういうのを知りたかった」と語り、B氏は、「初めての妊娠で、いろんなことがわからなくて、食べ物とか、気をつけることとか、やっていいことと悪いこととか、結構心配性で心配だったので、そういうのが教えてもらえたらいいなっ

て」と語り、《妊婦と胎児の健康維持に関することを知りたい》と思い、妊娠期にペアレンツサロンへ参加していた。

また、市町村や企業が主催する母親学級へも参加していた母親が複数いたが、B氏の「大学だとか、やっぱり安心感というか、民間の普通の所より…(中略)教授とか、助産師の資格を持っている人がいるっていうのが、結構安心感がありました」等の語りから、教育機関に所属する助産師を中心に運営していることが、《教室の主催者に対する安心を得る》ことにつながり、《知識や技術を獲得したい》、助産師や小児科医等の《専門家から正しい知識を学びたい》、《助産師へ尋ねて疑問や不安への対処を知りたい》という思いで参加していた。

2) 【自分自身の身体・心理・社会面の調整】

C氏は、マタニティヨガを実施したプログラム

への参加歴があり、「妊娠中のマッサージとか、ここは押さないほうがいいのか、ここを押したら楽になるとか、ヨガもいいけど」と語り、マタニティヨガだけでなく、妊娠期のマッサージやツボ押し等を学びたい意欲を示し、《出産に向けたからだづくり》を意識していた。また、複数の母親は、ペアレンツサロンへ参加し、「ここにきていろいろお話聞いていただけてすごい元気づけられた」、「リフレッシュできた」ことなどから、《精神的健康を維持・増進する》目的をもち参加していた。

D氏は、「できれば1年休んだ方が良かったって思います。頭がまず回ってないし、体もけっこう辛いので、ちょっと、二人育児をなめてたなあってすごく思って」と語り、《妊娠期に育児と仕事の両立に関する情報を得る》必要があったと考えていた。

### 3) 【妊娠期からの母子関係および夫婦関係の構築】

2名の初産婦である母親は、《胎児や子どもの発育に良いことを学びたい》という思いから参加し、胎児や子どもへの絆形成の一面がみられた。経産婦であるD氏は、「上の子中心になりがちで、あまり妊娠中の子どものことに思いを馳せる機会がない」ことから、マタニティヨガやピアノコンサートへ参加し、《胎児と向き合う貴重な時間を過ごす》希望があった。また、複数の母親が、胎児心音を聴くこと、ピアノコンサートやベビーマッサージへの参加により、《胎児や子どもとの一体感を得る》感覚をもち、母子の関係性を育んでいた。

また、母子関係のみならず、「夫婦で参加し、共感できるのは心強い」と感じ、《夫婦の関係性を促進する》ことが必要であると考えていた。

### 4) 【家族へ向けた支援】

C氏は、「こうしたら奥さんが喜ぶよとか、この子の出産のとき、病室ですごいイラつくことを夫にされたので、そういうのあったらおもしろい」、「おじいちゃん、おばあちゃんにも余計なこと言われてとかあったから、だからそういう教室があったらいい」と語り、《父親に自分や子どもに対する行動を学んでほしい》と考え、また、《専門職者に祖父母への支援をしてほしい》と希望していた。

D氏は、「(父親は)育休とるのなんて俺だけ

じゃないって言ってたので、あ、でも、けっこうそんな1年はとらないかもしれないけど、1週間くらいとろっかなあって人、けっこういたよって話をして、それはけっこう心が楽になったみたい」と語った。また、「コンサートの時下さった資料とか、ベビーマッサージの資料もそうですし、帰って、こんなことしたんだよって話すと、けっこう興味深く読んでたりしてた」と語り、ペアレンツサロンへ《参加できなかった父親と話題や資料を共有する》ことを自ら行っていた。

### 5) 【経妊婦や勤労妊婦が家族で気軽に参加できる場の提供】

D氏は、「一人目の時はそうやって参加する講座があったんですけど、二人目の時は・・・(中略)参加できる講座が少なかった」と語り、今回は初産であるB氏も「上子の預かりがあれば次の妊娠時にも参加したい」と考え、《経妊婦でも妊娠期の支援の場へ参加したい》という気持ちを抱いていた。

また、D氏は、「上の子とうちの夫を連れてきても、あ、なんか、ちょっと公園に行くーとか言って、抜けちゃったことが何回もあったので」、「なかなかお父さんが参加できる場ってないじゃないですか」と語り、《家族で参加したい》と思い、それぞれの立場から《参加しやすい教室設定を望む》、また、《父親が参加できる教室を望む》という希望があった。

### 6) 【母親同士の交流と支え合い】

C氏は、「他の妊婦との交流」を求め、初妊婦だけでなく経妊婦であっても《育児の仲間が欲しい》と感じ、さらに《情報交換の場を得たい》という思いで、ペアレンツサロンへ参加していた。D氏は、「里帰りをしなかったので、産褥入院(出産した施設を退院後の母子が再度入院し看護支援を得られる場)した経験を後進の妊婦さんに伝えたいと思ってるんですけど、なかなかそういう場がない」、「なかなか二人目だと里帰りしないお母さんも多いらしいので、みんな産後ケアを使った方が良く、多くの人に今言っている」と語り、他の母親を支えるために《自己の体験を伝承したい》という気持ちでペアレンツサロンへ参加していた。

表3 妊娠期および育児期の支援に関する父親のニーズ

時期	カテゴリー	サブカテゴリー	コード数
妊娠期	胎児や出生後の生活をイメージできる支援	子宮内の胎児を想像できる	1
		出産・育児へ向けた準備ができる	2
妊娠期・育児期	仕事に支障なく参加できる信頼性の高い継続支援の場の提供	妊娠期のペースメーカーとなる	1
		教育機関が提供する支援に対して信頼し安心を得る	1
		仕事との調整をつけて支援の場へ参加できる	2
		妊娠期からの継続的な支援の場を得る	2
育児期	母親への理解と共感を促進する専門的な関わり	母親への接し方に関する助言と専門職者による精神的支援を期待する	3
		ヨガの実践により母親と体験を共有できる	1
育児期	日常の育児に直結する知識、技術をタイムリーに得られる機会	日常の育児に直結する知識や技術を獲得したい	2
		日常の疑問へタイムリーに対処したい	2

7) 【自己の体験を他者へ表現し意味づけを行う場の提供】

D氏は、「一人目の時は、とにかくわからないことだらけで、生まれたらすぐおっぱいが飲ませられると思っていたので、でも、おっぱいなかなか出ないし、子どももなかなかくわえてくれないし、やっと1か月後くらいにやっと安定した」と語り、産後1か月間に自ら体験した《初めての育児で直面する母乳育児の戸惑いを表現する》場として活用していた。

さらに、D氏は、陣痛と帝王切開術後の痛みについて、「フルで体験したような気がします。けっこう頑張ってたんですけどね…」と語り、《出産体験を振り返る》かのごとく、自分の予想とは異なった出産体験について他者へ表現していた。D氏は、ペアレンツサロン参加中にも、実際に自己の育児や出産体験を他の参加者へ語る場面がみられ、自らの出産や育児の体験を他者へ表現することにより、自己の体験の意味づけを行っていた。

3 地域で提供される妊娠期および育児期の支援に関する父親のニーズ

地域で提供される妊娠期および育児期の支援に関する父親のニーズについて、17のコードを抽出し、10個のサブカテゴリーを生成した。さらに、【胎児や出生後の生活をイメージできる支援】【仕事に支障なく参加できる信頼性の高い継続支援の場の提供】【母親への理解と共感を促進する

専門的な関わり】【日常の育児に直結する知識、技術をタイムリーに得られる機会】の4個のカテゴリーに分類し、表3に示した。

1) 【胎児や出生後の生活をイメージできる支援】

E氏は、マタニティコンサートに参加し、ピアノの生演奏を聴くことで、「お腹のなかでこういう風に聞こえてますという話はよかった」と感じ、《子宮内の胎児を想像できる》機会を得ていた。また、ペアレンツサロンへ参加し、自主的に勉強することで、《出産・育児へ向けた準備ができる》ことを望み、胎児や出生後の生活をイメージしていた。

2) 【仕事に支障なく参加できる信頼性の高い継続支援の場の提供】

F氏は、「一般の所でやると、結局その、勧誘とか入るじゃないですか、大学ならそういうものないだろうみたいなのがありましてね」と語った。また、G氏には、「仕事のためヨガに1度参加した他は参加できなかった」経緯があり、E氏は、ペアレンツサロンへの参加は、「漠然と過ごすより、月1回イベントがあるとペースメーカーとなる」と感じ、《妊娠期のペースメーカーとなる》ペアレンツサロンへ定期的に参加し、3名の父親らは、《教育機関が提供する支援に対して信頼し安心を得る》体験をしつつ、《仕事との調整をつけて支援の場へ参加できる》ことを望んでいた。

また、ペアレンツサロンは、E氏にとって、「産後のフォローアップはよかった」と思える場

であり、日常生活で育児について「仲間に話を聞くことはない」G氏にとっては、《妊娠期からの継続的な支援の場を得る》ことにつながっていた。

### 3) 【母親への理解と共感を促進する専門的な関わり】

G氏は、「妊娠中、奥さんに何をしてあげたらいいとか、どう接したらいいとか、専門家からも先輩からもアドバイスをほしい」と語る一方で、「同じ状況にあるお母さんを集めてストレス発散させてあげるとか、男にはわからないですからね」と語り、母親への関わり方を学びたい意欲を示す一方、関わり方を学んでも自分だけでは対処に及ばない一面があると考え、《母親への接し方に関する助言と専門職者による精神的支援を期待する》気持ちがあった。

E氏は、「ヨガは教えてもらって家でもやっていた」ことから、マタニティヨガのプログラムへの参加により、自宅に帰ってからも《ヨガの実践により母親と体験を共有できる》きっかけを得ていた。

### 4) 【日常の育児に直結する知識、技術をタイムリーに得られる機会】

第1子の育児を行っているE氏は、「食事とかアレルギーとか、やっぱり一番アトピーになりやすいのが乾燥しやすいとか、保湿やちゃんとしたほうがよいと言われてしっかり気を付けてます」と語り、子どもの世話における《日常の育児に直結する知識や技術を獲得したい》と考えていた。

また、E氏は、「出産した後でフォローアップとかあったのはよかった…(中略)近所の小児科とか忙しくてお時間取れないから、あんなかたちはよかった」と語り、F氏は、「育児書にあるような夜泣きがなく、それはいいのかと思った時期もあった」と語ったことから、実際の育児で感じた《日常の疑問へタイムリーに対処したい》という希望があった。

## Ⅶ 考 察

地域の専門職者から提供される妊娠期および育児期の支援に関する母親および父親のニーズを考察し、父親役割獲得を促進する支援について検討する。

### 1 インタビュー参加者について

東京都における第1子出生時の母親の平均年齢は上昇傾向にあり、平成28年では32.3歳<sup>9)</sup>であったことから、A氏およびD氏は、平均的な年齢で第1子を出産し、B氏およびC氏は、第1子を30歳代後半で出産した。

### 2 母親と父親の支援ニーズの相違と父親役割獲得を促進する支援

母親は、母子および夫婦関係の促進を意識しつつ、【知識、技術の提供と不安への対処に関する専門職者の関わり】を求め、自身の身体や子どものことに関してすでに起きている、またはこれから起こるかもしれないと予測する具体的な不安や疑問を妊娠期から助産師へ尋ね、対処していた。一方の父親は、妊娠期には【胎児や出生後の生活をイメージできる支援】を望み、母親のように具体的な不安を感じ対処するために助産師へ尋ね、助言を求めるのではなく、出産や育児へ向けた準備をしつつ、胎児や生まれてくる新生児、新しい家族が加わった生活をイメージしようとしていたと考えられる。このような父親に対して産前のペアレントサロンで行っていた胎児心音を父親とともに聴取することやピアノコンサートを通して、どのように胎児には聞こえているか等想像することは、胎児をイメージしようとする父親への有効な支援となっていたと考えられる。

新道ら<sup>10)</sup>は、父性意識は、父親として子どもに関わることのなかで発展し、強められていくと述べ、宮内ら<sup>11)</sup>は、産前教室へ参加後であっても父親としての当事者意識を得られないことや出産後でも父親になることの実感がわきにくい父親の存在を明らかにしている。これらのことから、母親のように自身の身体を通して胎児を実感することが難しい父親は、母親が抱くような具体的な不安を抱くのではなく、妊娠期には胎児をイメージしようとすることに留まり、育児期を迎え、実際の育児に向き合う段階になり、初めて日常の育児に直結する知識、技術をタイムリーに得られる機会を求めるようになったのではないかと考えられる。

さらに、河本ら<sup>12)</sup>は、父親になるプロセスの質的研究で、父親が産前から父親になったことを実感することは難しいことを示唆し、Catrina. J.et



al<sup>13)</sup> は、妊娠期に支援を提供するクラスへ参加する母親は明確なニーズをもつが、父親は知識の獲得や準備といった漠然としたニーズで参加していることを明らかにしている。これらのことから、実際の育児へ直面して初めて知識や技術をタイムリーに得たいと考える父親に対し、育児のスタート地点である産褥早期の専門職者の支援は、父親としての実感を得て、父親役割獲得を促進する支援につながると予測される。具体的には、産後の母親への支援と同様に、母子の面会へ訪れた父親に対し、抱っこ、おむつ交換、哺乳、沐浴等の育児技術を教授し、また、技術のみならず、抱っこや話しかけにより父子が触れ合う時間を多くもつための意図的な関わり等が考えられる。

産褥早期の母親や父親の支援に関する研究について、母子早期接触や児がNICUに入院中の母親や父親を対象とした研究は多くあるが、一般病棟に入院する新生児をもつ父親を対象とし、父親役割獲得を促進する支援に関する研究は少ない。国内では、山口ら<sup>14)</sup> の父親の育児行動の促進を目的としたプログラムを妊娠期と産褥1-4日に実施し、産褥早期の実施により効果を認めた研究、国外では、Carol. S. et al<sup>15)</sup> のベビーマッサージを含む乳児のケアに関するビデオ視聴後に児と接した産褥早期の父親の父子の関りが増加したことを明らかにした研究等があるが、実際に産褥早期にこのような支援を享受できる父親は少ないことが予測される。

仕事との調整がつかずに、あるいはその他の理由で、専門職者による支援を妊娠期に受けずに育児期を迎えた父親にとっては、産褥早期の専門職者による支援は、より一層その後の父親役割獲得過程を左右する鍵となる支援であると考えられる。以上のことから、地域において、父親への支援に関わる専門職者は、それぞれの父親の妊娠期や産褥早期に享受した専門職者による支援内容を考慮し、とくに産褥早期に重要な父親役割獲得を促進する支援を育児期に補う関わりが必要である。

### 3 母親を介した父親の心理・社会的支援

母親には、産前にマッサージ、つば押しやヨガ等の実践により身体面の調整を図り、産後うつについての知識を得ることや産前から育児と仕事の

両立についてイメージし、入念に考えることにより心理・社会面の調整を図るニーズがあった。一方、父親からは、父親自身の身体・心理・社会面の調整に関するニーズは今回のインタビューから抽出されなかった。父親は、妊娠に伴う自身の身体の変化や不調はないため、妊娠期に身体面の調整を図るニーズは抽出されなかったと考えられる。

D氏は、参加できなかった父親とペアレンツサロンでの話題や資料を自ら共有することにより、育児休暇を取得するのは自分だけではないかと考えていた父親の心が楽になったと感じていた。身近に育児休暇を取得する他の父親がいない場合、父親がこのような不安を抱くことは当然である。しかし、ペアレンツサロンの内容が、参加した母親を介して父親へ伝わることにより、父親の不安の軽減や身近で前例がない父親の育児休暇を取得する行動の後押しに繋がった可能性がある。また、参加できなかった父親は、資料を読むことにより、一時でも胎児や子どものことを考えることにつながったのではないかと予測される。つまり、ペアレンツサロンの内容は、母親を介して、父親の心理・社会面の支援につながった可能性がある。

亀崎ら<sup>6)</sup> の研究では、未就学児の父親の育児困難感と父親自身の不安・抑うつ状態との関連が明らかにされている。不安や抑うつは育児困難感につながる、あるいは育児困難感は不安や抑うつにつながると考えられ、父親の心理面を健康に維持することは、育児への適応に影響することから、父親の心理面に対する支援は重要である。

これらのことから、父親の心理・社会面に対する支援のニーズは、今回のインタビューからは抽出されなかったが、母親を介して支援される可能性が示唆された。専門職者による支援の場へ参加できない父親がいる場合は、母親を介した父親への支援につながるよう考慮し、母親と関わっていく。

### 4 家族に対する支援のニーズと共感を促進する支援

母親および父親は、自身が専門職者の支援を享受するだけでなく、自分以外の家族へ向けた支援の提供を望み、父親は、母親への理解と共感を促

進する専門的な関わりを望んでいた。出産時にいらいらすることをした父親に対し、母親がもっと学んでほしい、あるいは父親が母親を理解したいと望んでいたことは、互いにもっと共感してほしい、あるいは共感したいと感じていた一面があると考えられ、母親と父親は自分だけでなく家族成員それぞれが専門職者による直接的な支援を享受することを通して、互いに共感できることを求めていると予測できる。

木越ら<sup>16)</sup>は、父親役割獲得プロセスの2番目に夫婦としての体験の共有を挙げ、妊娠期に胎児を五感で感じ、出産準備を夫婦で楽しむ等体験を共有すると父性意識は発達しやすいと考察している。ペアレンツサロンにおいて、マタニティヨガを通じて母親と父親が体験を共有していたことは、互いのニーズを満たし、さらに父親役割獲得を促進する支援となっていたと考えられる。

また、渡邊ら<sup>17)</sup>は、妊娠期の夫婦への支援において、オーストラリアで母親の産後うつ予防の効果を認めた夫婦の共感性を高める介入を行い、介入群の父親の共感性の得点は高かったことを明らかにしている。これらのことから、地域において、父親への支援に関わる専門職者は、父親自身に対するニーズだけでなく、家族成員に対する専門職者による直接的支援のニーズも考慮し、父親の共感性を促進する支援を提供していく必要がある。

さらに、ペアレンツサロンへ参加したすべての母親は、母親同士の交流と支え合いのニーズをもち、2回目の出産であっても仲間づくりや情報交換を求めて参加していたことから、同じ立場である母親を共感しあえる対象として求めている可能性がある。一方、父親同士の交流ニーズについては、今回のインタビューでは抽出されなかった。一般的に地域で行われている妊娠期や育児期の支援では、母親または父親同士の交流、仲間づくりを目的のひとつとして開催されている場が多くみうけられる<sup>18-21)</sup>。しかし、田辺ら<sup>22)</sup>は、幼稚園や保育所に通う子どもをもつ父親で他の父親との交流ニーズをもつ父親は3割に満たない結果を明らかにしている。

これらのことから、母親は、父親だけでなく同じ立場にある他の母親を共感しあえる対象として認識しているが、一方の父親が共感しあえる対象

として認識しているのは、おもに母親であると予測される。母親と父親はともに共感しあえる存在を望むが、その対象の認識には違いがあるという特徴を十分考慮し、共感性を促進する支援に努めていく必要がある。

## 5 研究の限界と今後の課題

本研究の参加者は、限られた地域に暮らす7名の母親と父親であり、自ら地域における妊娠期および育児期の支援の場へ参加していることから支援のニーズはもともと高いと予測されるため、結果を一般化することは難しい。また、インタビューの逐語録から抽出したコード数は母親が圧倒的に多く、父親の語りを充分引き出せていない可能性がある。今後は、本研究の結果をもとに専門職者により提供される妊娠期および育児期の支援内容や時期や母親と父親のニーズに関する検討を重ね、より有効な支援へ発展させていく。

## VIII 結 論

助産師を中心とする地域の専門職者から提供される妊娠期および育児期の支援に関する母親および父親のニーズを明らかにし、父親役割獲得を促進する支援について検討した結果、以下のことが明らかとなった。

- 1 母親のニーズは、【知識、技術の提供と不安への対処に関する専門職者の関わり】【自分自身の身体・心理・社会面の調整】【妊娠期からの母子関係および夫婦関係の構築】【家族へ向けた支援】【経妊婦や勤労妊婦が家族で気軽に参加できる場の提供】【母親同士の交流と支え合い】【自己の体験を他者へ表現し意味づけを行う場の提供】であった。
- 2 父親のニーズは、【胎児や出生後の生活をイメージできる支援】【仕事に支障なく参加できる信頼性の高い継続支援の場の提供】【母親への理解と共感を促進する専門的な関わり】【日常の育児に直結する知識、技術をタイムリーに得られる機会】であった。
- 3 地域における父親役割獲得を促進するために、産褥早期に有効と考えられる父親の役割獲得を促進する支援を補う関わり、母親を介した父親の心理・社会面の支援および父親の共感性を促進する支援の有効性が示唆され

た。

本研究は、2018～2019年度「千代田学」(千代田区が区内の教育機関に補助する制度)の助成を受けて実施した。

### 謝辞

インタビュー調査へご協力いただきました皆様へ心より感謝申し上げます。

また、ペアレンツサロンにて、ピアノコンサートを開催していただきました共立女子大学、村上康子先生、小児科医の立場からご講義をいただきました森蘭子先生へ心より感謝申し上げます。

### 引用文献

- 1) 公益社団法人日本助産師会：助産師の声明・綱領 <https://www.midwife.or.jp/midwife/statement.html> (2020/10/21 検索)
- 2) 磯山あけみ：勤務助産師が行う父親役割獲得を促す支援とその関連要因, 日本助産学会誌, 29 (2), 230-239, 2015.
- 3) Takeishi Yoko, Nakamura Yasuka, Kawajiri Maiko, et al. : 日本人夫婦のためのコペアレンティング (夫婦共同育児) に着目した出生前夫婦教育プログラムの開発 準実験的研究 (Developing a Prenatal Couple Education Program Focusing on Coparenting for Japanese Couples: A Quasi-Experimental Study), The Tohoku Journal of Experimental Medicine, 249 (1), 9-17, 2019.
- 4) 原田春美, 小西美智子：両親を対象とした子育て支援プログラム立案と実践方法の検討, ヒューマンケア研究学会誌, 9 (2), 33-43, 2018.
- 5) Ueyama Naomi, Hiroya Matsuo : The practice and evaluation of an educational program on the promotion of Japanese fathers' involvement in child rearing, Bulletin of health sciences Kobe, (30), 1-19, 2015.
- 6) 亀崎明子, 田中満由美, 前本京, 他：未就学児をもつ父親の育児困難感の実態と関連要因の検討, 母性衛生, 59 (2), 383-389, 2018.
- 7) 小林佐知子, 小山里織：乳児期における父親の抑うつ傾向と関連要因, 児童青年精神医学とその近接領域, 55 (2), 189-196, 2014.
- 8) 岸田泰子, ケニヨン充子, 三里久美子, 他：千代田区における妊娠期から育児への継続支援の一方策～ペアレンツサロンの運営と評価, 2019年度「千代田学」報告書, 2019.
- 9) 東京都報道発表. 第2章 東京の子供と家庭をめぐる状況：  
[https://www.metro.tokyo.lg.jp/tosei/hodohappyo/press/2018/03/29/documents/23\\_03.pdf](https://www.metro.tokyo.lg.jp/tosei/hodohappyo/press/2018/03/29/documents/23_03.pdf) (2020/10/21 検索)
- 10) 新道幸恵, 和田サヨ子：母性の心理社会的側面と看護ケア, 医学書院, 1996.
- 11) 宮内隆弘, 大宮 朋子：両親学級に参加した夫の体験とニーズ 参加前中後と出産後の面接調査から, 日本母子看護学会誌, 11 (2), 87-95, 2018.
- 12) 河本恵理, 田中満由美, 杉下征子, 他：父親になるプロセス, 母性衛生, 58 (4), 673-681, 2018.
- 13) Catriona Jones, Franziska Wadephul, Julie Joomeen: Maternal and paternal expectations of antenatal education across the transition to parenthood, British Journal of Midwifery, 27 (4), 235-241, 2019.
- 14) 山口咲奈枝, 佐藤幸子：育児行動の促進を目的とした父親学級プログラムの介入時期別にみた効果の検討, 母性衛生, 54 (4), 504-511, 2014.
- 15) Carol Suchy, Gloria Morgan, Susan Duncan, et al.: Teaching Father-Infant Massage during Postpartum Hospitalization: A Randomized Crossover Trial, MCN.The American journal of maternal child nursing, 45 (3), 169-175, 2020.
- 16) 木越郁恵, 泊祐子：周産期における夫の父親役割獲得プロセス, 家族看護学研究, 12 (1), 2006.
- 17) 渡邊一代, 石井佳世子, 石田久江, 他：産後うつ病予防を目的とした妊娠期からの“夫婦の共感性を高めるセッション”の試行：対象者の共感性と精神健康度とセッション評価, 日本健康学会誌, 85 (2), 80-89, 2019.
- 18) 原田春美, 小西美智子両親：両親を対象とした子育て支援プログラム立案と実践方法の検討, ヒューマンケア研究学会誌, 9 (2), 33-43, 2018.
- 19) 上山直美, 松尾博哉：父親の育児参加を高める教育プログラムの有用性の検討, 兵庫県母性衛生学会雑誌, 21, 76-80, 2012.
- 20) 安成智子, 神崎初美：育児支援プログラムに参加した父親の育児ストレス低下の特徴について, 宇部フロンティア大学看護学ジャーナル, 7 (1), 9-13, 2014.
- 21) 前原邦江, 大月恵理子, 林ひろみ, 他：乳児をもつ家族への育児支援プログラムの開発 出産後1～3ヵ月の母子を対象とした家族支援プログラムの評価, 千葉看護学会誌, 13 (2), 10-18, 2007.
- 22) 田辺昌吾, 川村千恵子, 野原留美, 他：乳幼児をもつ父親の対する子育て支援の方向性—ニーズと充足度からの検討, 児童・家族相談所紀要, 24, 55-64, 2007.